HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東北帝国大学農科大学林学科学生の専攻分野と卒後進路
Author(s)	佐々木, 朝子; Sasaki, Tomoko
Citation	北海道大学大学文書館年報, 17, 75-96
Issue Date	2022-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85379
Type	departmental bulletin paper
File Information	3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜ 研究ノート ＞

東北帝国大学農科大学林学科学生の専攻分野と卒後進路

佐々木　朝子

はじめに

東北帝国大学農科大学（以下、「東北帝大農科大」と略す）は、札幌農学校を前身として、1907年９月１日に開学した[1)]。1918年４月の北海道帝国大学の設置後は北海道帝国大学農科大学となり[2)]、「帝国大学令」（1919年２月７日公布、勅令第十二号）[3)]をうけ、1919年４月１日より北海道帝国大学農学部となった。

東北帝大農科大の学科には、修業年限３年の四学科（農学科・畜産学科・農芸化学科・林学科）が設置された[4)]。林学に関する講座は、1909年５月に林学第一講座が設置され[5)]、続いて1910年３月に林学第二講座が[6)]、1911年に林学第三講座、林学第四講座が[7)]、1912年に林政学及森林管理学講座が設置された[8)]。

1910年代、帝国大学は、帝国大学（1886年設置、1897年東京帝国大学に改称）、京都帝国大学（1897年設置）、東北帝国大学（1907年９月設置）、九州帝国大学（1910年設置）があり、東京帝国大学には1890年に、東北帝国大学には1907年に農科大学が設置された。なお、九州帝国大学には1919年に、京都帝国大学には1923年に農科大学が設置された。

1890年、帝国大学の農科大学林学科卒業生に「林学士」の称号が授与された。同年に農科大学として改組した東京農林学校の学生に林学士を授与したのが最初であった[9)]。東北帝大農科大には、1910年９月に林学科に第一期の学生が入学し[10)]、1913年から1917年にかけて、計59名[11)]の卒業生に「林学士」の称号を授与した[12)]。

本稿では、東北帝大農科大林学科の卒業生を対象として、帝国大学における林学教育と卒後進路との関わりを考察する準備として、①『東北帝国大学農科大学一覧』（以下、『一覧』と略す）に基づいて林学科の授業科目及び担当教官を確認する。②農科大林学科卒業生の卒業論文題目を調査し、「森林経理学」「造林学」等の林学の専攻分野毎に、論文題目や卒業後の進路の傾向を分析する。

１．東北帝国大学農科大学林学科の授業科目及び担当教官について

１－１．林学科の授業科目について

東北帝大農科大の学年暦は毎年９月11日から翌年９月10日までを一学年とし、９月11日から翌年１月７日までを第一学期、１月８日から４月７日までを第二学期、４月８日から

９月10日までを第三学期とする三学期制であった[13]。

林学科の授業科目は、「東北帝国大学農科大学規則」（1907年６月制定[14]）の第一章「農科大学学則」中の第二節「学科及授業科目」[15]に定められた。1910年６月に「東北帝国大学農科大学規則」が改正された[16]。1910年９月に入学した林学科第一期生は、1910年６月改正の「東北帝国大学農科大学規則」に定められたカリキュラムに基づく教育を受けた。また、「東北帝国大学農科大学規則」は1913年６月に再度改正された[17]。

表１は、1907年、1910年、1913年の「東北帝国大学農科大学規則」中で定められた、林学科の授業科目及び必修時間数の一覧である。

表１　東北帝国大学農科大学林学科授業科目及び必修時間数表（1907年、1910年、1913年）

学年 講義／ 実験等	規則（1907年6月制定） 科目（必修時間数[1学期,２学期,3学期]）	規則（1910年6月改正） 科目（必修時間数[1学期,2学期,3学期]）	規則（1913年6月改正） 科目（必修時間数[1学期,2学期,3学期]）
第一年 講義	岩石学（2,−,−） 土壌論（3,−,−） 気象学（−,2,2） 植物生理学（4,3,3） 森林動物学（2,2,2） 森林測量学（3,3,3） 森林数学（3,3,3） 造林学（−,−,3） 経済学（2,3,3） 法学通論（2,2,2） 林学通論（2,3,3）	岩石学（2,1,−） 土壌学（3,−,−） 気象学（−,2,2） 植物生理学（2,2,2） 森林植物学（2,2,2） 森林昆虫学（3,2,−） 応用鳥学（−,2,2） 最小二乗法（2,−,−） 森林工学（−,3,3） 森林測量学（2,2,2） 森林数学（3,2,2） 造林学（−,−,2） 経済学（3,2,2） 法学通論（2,2,2）	岩石学（3,−,−） 土壌学（3,−,−） 気象学（−,2,2） 森林植物生理及生態学（2,2,2） 森林植物形態及分類学（2,2,2） 森林昆虫学（2,2,2） 応用鳥学（−,2,2） 最小二乗法（2,−,−） 森林工学（−,3,2） 森林測量学（2,2,2） 測樹学（3,3,2） 造林学（−,−,2） 経済学（3,3,3） 法学通論（2,2,2）
第一年 実験・ 実習	動物学実験（1回,1回,−） 植物学実験（1回,1回,1回） 測量実習（1回,1回,1回） 造林実習（−,−,1回）	岩石学実習（−,1回,−） 森林植物学実験（1回,1回,1回） 森林昆虫学及応用鳥学実験（1回,1回,1回） 森林測量学実習及製図（1回,1回,1回） 森林数学実習（−,−,1回） 造林学実習（−,−,1回） 経済学演習（−,2,2） 実地演習（不定,不定,不定）	岩石学実験（−,1回,−） 森林植物形態及分類学実験（1回,1回,1回） 森林昆虫学実験（1回,1回,−） 応用鳥学実験（−,1回,1回） 森林測量学実習及製図（1回,1回,1回） 測樹学実習（−,−,1回） 造林学実習（−,−,1回） 経済学演習（1回,1回,1回） 林学実地演習（不定,不定,不定）

第二年講義	森林数学（3,−,−） 森林道路論（2,2,2） 造林学（3,3,3） 植物病理学（3,3,3） 森林利用学（3,3,3） 理水及砂防論（−,−,3） 森林経理学（−,2,2） 林政学（−,−,3） 森林法律学（2,2,2） 森林管理学（3,3,−） 森林保護学（3,3,2）	森林数学（3,−,−） 森林工学（3,3,2） 造林学（2,2,2） 樹病学（2,2,−） 森林利用学（2,2,2） 森林理水及砂防工学(3,3,3) 森林経理学（−,4,4） 林政学（−,3,3） 森林法律学（3,3,2） 林産製造学（2,2,2） 財政学（2,2,2）	林価算法及林業較利学（2,2,−） 森林工学（2,2,−） 造林学（2,2,2） 樹病及木材腐蝕学（2,2,2） 森林利用学（−,2,2） 森林理水及砂防工学（2,2,3） 森林経理学（2,3,3） 林業政策（−,−,3） 森林法律学（2,2,2） 林産製造学（2,2,2） 木材工芸的性質論（2,−,−） 財政学（2,2,2） 行政法（2,2,2） 民刑事訴訟法（2,2,2）
第二年実験・実習	森林道路実習（不定,不定,不定） 造林実習（不定,不定,不定） 実地演習（不定,不定,不定）	森林工学計画及実習（1回,1回,1回） 造林学実習（1回,−,1回） 林産製造学実験（1回,1回,−） 森林利用学実習（−,1回,1回） 森林理水及砂防工学計画及実習（−,−,1回） 実地演習（不定,不定,不定）	測樹学実習（1回,1回,−） 林価算法及林業較利学演習（−,−,1回） 森林工学設計及実習（1回,1回,−） 造林学実習（1回,−,1回） 林産製造学実験（2回,1回,−） 木材工芸的性質実験（−,1回,−） 森林利用学実験（−,−,1回） 森林理水及砂防工学実習（−,−,1回） 林学実地演習（不定,不定,不定）
第三年講義	造林学（3,3,−） 森林経理学（3,3,−） 林政学（3,3,−） 林産製造学（3,3,−） 理水及砂防論（3,3,−） ［随意科目］農学（3,3,−） ［随意科目］狩猟論（2,−,−）	造林学（2,2,−） 森林経理学（1,1,−） 林政学（3,3,−） 森林利用学（2,2,−） 森林保護学（3,3,−） 森林管理学（2,2,−） 木材商況論（1,2,−） ［随意科目］農学（3,3,−） ［随意科目］狩猟論（2,1,−） ［随意科目］植民学（2,2,−）	造林学（2,2,−） 森林保護学（3,3,−） 森林利用学（2,2,−） 森林経理学（1,1,−） 森林管理学（2,2,−） 林業政策（3,2,−） 林業史（−,2,−） 木材貿易論（1,1,−） 森林美学（2,−,−） 狩猟論（2,1,−） 森林牧畜論（−,2,−） 農政学（3,3,−） 植民学（2,2,−）
第三年実験・実習	造林実習（不定,−,−） 林産製造実習（不定,不定,−） 実地演習（−,−,不定） 卒業論文	造林学実習（1回,−,−） 森林利用学実習（1回,−,−） 森林経理学実習（1回,−,−） 実地演習（不定,不定,−） 卒業論文	造林学実習（1回,−,−） 森林利用学実習（1回,−,−） 森林経理学実習（1回,1回,−） 林学実地演習（不定,不定,−） 卒業論文

典拠）『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』、『東北帝国大学農科大学一覧　自大正二年至大正三年』所載の「東北帝国大学農科大学規則」による。
注）資料中の漢数字は算用数字に改めた。また、随意科目については［随意科目］と表示した。

⑴　「東北帝国大学農科大学規則」（1907年９月制定）に規定された授業科目

第一年では、講義として第一学期に「岩石学」「土壌論」が、第二学期・第三学期に「気象学」が設定されており、通年で「植物生理学」「森林動物学」、「森林測量学」「森林数学」、「経済学」「法学通論」「林学通論」が、第三学期に「造林学」が設定されている。うち、

「岩石学」は農芸化学科と、「土壌論」「気象学」「植物生理学」は農学科・農芸化学科と、「経済学」「法学通論」は農学科・畜産学科・農芸化学科の授業科目と共通しており、基礎科目と考えられる[18]。林学科のみの講義には「森林動物学」「森林測量学」「森林数学」「造林学」「林学通論」がある。実験・実習には「動物学実験」「植物学実験」「測量実習」「造林実習」があり、それぞれ講義の「森林動物学」「植物生理学」「森林測量学」「造林学」に対応する。

第二年では、第一学期に第一年から引き続き「森林数学」を受講し、第二学期・第三学期には「森林経理学」を受講した。第一学期・第二学期には「森林管理学」を、第三学期には「林政学」を受講した。通年の講義には「森林道路論」「造林学」「植物病理学」「森林保護学」「森林法律学」「森林利用学」があった。「理水及砂防論」の講義は第三学期のみであった。実験・実習には、「森林道路論」「造林学」に対応する実習として「森林道路実習」「造林実習」が設定され、さらに、「実地演習」が設定された。

第三年には、第二年から引き続き「理水及砂防論」「造林学」「林政学」「森林経理学」の講義があった。第三年に新たに加わる授業科目には、「林産製造学」、随意科目の「農学」「狩猟論」がある。実習には「造林学」「林産製造学」に対応する「造林実習」「林産製造実習」を予定していた。第三学期には「実地演習」のみが予定されていた。そして、第三年には「卒業論文」の提出が課された。

⑵　「東北帝国大学農科大学規則」（1910年６月改正）に規定された授業科目

1910年６月に「東北帝国大学農科大学規則」が改正され、林学科の授業科目にも変更が加わった。表２は1907年の規則制定時からの変更点の一覧である。

表２　「東北帝国大学農科大学規則」（1910年６月改正）による変更点

学年	変更前	変更後
第一年	土壌論	土壌学
	–	（追加）森林植物学
	森林動物学	森林昆虫学/応用鳥学
	–	（追加）最小二乗法
	林学通論	（削除）
	–	（追加）森林工学
	–	（追加）岩石学実験
	植物学実験	森林植物学実験
	動物学実験	森林昆虫学及応用鳥学実験
	測量実習	森林測量学実習及製図
	–	（追加）森林数学実習
	造林実習	造林学実習
	–	（追加）経済学実習

	−	(追加)実地演習
第二年	森林道路論	森林工学
	−	(追加)林産製造学
	植物病理学	樹病学
	理水及砂防論	森林理水及砂防工学
	森林保護論	(削除)
	森林管理学	(削除)
	−	(追加)財政学
	−	(追加)林産製造学実験
	森林道路実習	森林工学計画及実習
	−	(追加)森林理水及砂防工学計画及実習
第三年	理水及砂防論	(削除)
	−	(追加)森林管理学
	−	(追加)森林保護学
	林産製造学	(削除)
	−	(追加)森林利用学
	−	(追加)木材商況論
	−	(追加)［随意科目］植民学
	造林実習	造林学実習
	−	(追加)森林利用学実習
	−	(追加)森林経理学実習

典拠）1910年６月21日付『官報』第8098号、「学事」による。
注)「変更後」:「変更前」から追加された項目には（追加)、削除された項目には（削除）と記した。

「森林動物学」が２科目（「森林昆虫学」「応用鳥学」）に分割されている。「森林昆虫学」の必修時間数は第一学期に週３時間、第二学期に週２時間、「応用鳥学」の必修時間数は第二学期・第三学期に週２時間が設定されており、通年で週２時間の必修時間数を課していた「森林動物学」と比較して講義時間が増加している。また、数学科目として、既存の「森林数学」に加えて「最小二乗法」が課された。実習では、「岩石学」「森林数学」に対応する「岩石学実験」「森林数学実習」が加わった。

第二年の講義には、新たに「林産製造学」「財政学」が設定され、実習にも「林産製造学実験」が加わった。変更以前には第二年・第三年を通じて設定されていた「理水及砂防論」は第二年の「森林理水及砂防工学」に変更され、「森林理水及砂防工学計画及実習」が増加した。代わりに、第二年で履修していた「森林保護学」「森林管理学」を第三年で履修する。第三年では、さらに「森林利用学」、「木材商況論」、随意科目の「植民学」が加わり、実習に講義に対応する「森林利用学実習」「森林経理学実習」が加わった。第一年から第三年までを通して、1907年に制定された授業科目に比べてより多くの講義・実習が課されるようになったといえよう。

⑶ 「東北帝国大学農科大学規則」（1913年６月改正）に規定された授業科目

1913年６月の「東北帝国大学農科大学規則」改正により、林学科の授業科目にはさらに変更が加えられた。

表３　「東北帝国大学農科大学規則」（1913年６月改正）による変更点

学年	変更前	変更後
第一年	植物生理学	森林植物生理及生態学
	森林植物学	森林植物形態及分類学
	森林数学	測樹学
	森林植物学実験	森林植物形態及分類学実験
	森林昆虫学及応用鳥学実験	森林昆虫学実験/応用鳥学実験
	森林数学実習	測樹学実習
	実地演習	林学実地演習
第二年	森林数学	林価算法及林業較利学
	樹病学	樹病及木材腐食学
	林政学	林業政策
	－	（追加）木材工芸的性質論
	－	（追加）行政法
	－	（追加）民刑事訴訟法
	－	（追加）測樹学実習
	－	（追加）林価算法及林業較利学演習
	－	（追加）木材工芸的性質実験
	実地演習	林学実地演習
第三年	林政学	林業政策
	木材商況論	林業貿易論
	－	（追加）林業史
	－	（追加）森林美学
	［随意科目］農学	（削除）
	－	（追加）森林牧畜論
	－	（追加）農政学
	実地演習	林学実地演習

典拠）『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』、『東北帝国大学農科大学一覧　自大正二年至大正三年』所載の「東北帝国大学農科大学規則」による。
注）「変更後」：「変更前」から追加された項目には（追加）、削除された項目には（削除）と記した。

1913年６月の規則改正により、「植物生理学」が「森林植物生理及生態学」、「森林植物学」が「森林植物形態及分類学」となるなど、科目名がより詳細に変更された。第一年の「森林昆虫学及応用鳥学実験」は「森林昆虫学実験」「応用鳥学実験」に分割された。第二年では、「行政法」「民刑事訴訟法」といった法学関連の科目や、「木材工芸的性質論」

とそれに対応する「木材工芸的性質実験」が増加した。「森林数学」は、第一年では「測樹学」、第二年では「林価算法及林業較利学」に科目名が変更され、講義に対応する実習「測樹学実習」「林価算法及林業較利学演習」が第二年に設定された。第三年では、「林業史」「森林美学」「森林牧畜論」が新たに講義に加わった。

以上が、1907年から1917年の林学科の授業科目の変遷である。1907年の「東北帝国大学農科大学規則」制定時に定めた授業科目を基本として、1910年６月の規則改正時には、「森林動物学」を「森林昆虫学」「応用鳥学」の二科目に分割し、「森林利水及砂防工学」を第二年で集中的に学ぶように変更を加えた。1913年６月の規則改正時には、一部の科目をより詳細で専門的な科目名に変更するとともに、第二年の「行政法」や第三年の「森林美学」といった新たな科目を追加した。実験や実習は、講義に対応する実験が追加された。1907年から1917年を通じて、第三年に卒業論文が課されている。

１－２．林学科の担当教官について

農科大では、1907年から1918年の間に、林学に関する講座を増設し、教官を増員していった。1907年９月から1918年３月に、林学を担当した教官を以下の表４に示す。

表４　東北帝国大学農科大学の林学担当教官一覧（1907年９月～1918年３月）

氏名	学位（出身校）	職名（期間）	講座及び担当（期間）	備考
宍戸乙熊	林学士（東京帝大）、林学博士	助教授（1907.9～） 教授（1910.8～）	林政学及森林管理学講座担任（1912.8～）	林学実科教授 海外留学（1908.1～1912.7）
小出房吉	林学士（帝大）、林学博士	教授（1909.6～）	林学第一講座担任（1910.8～）	林学実科教授
新島善直	林学士（帝大）、林学博士	教授（1910.8～）	林学第二講座担任（1910.8～）	林学実科教授
堀観次郎	林学士（東京帝大）	助教授（1910.8～1912.6）	林学第四講座分担（1911.7～1912.6）	林学実科教授
宮井健吉	林学士（東京帝大）	助教授（1910.8～） 教授（1915.8～）	林学第三講座担任（1913.7～）	林学実科教授 海外留学（1910.1～1913.4）
内山幸三	林学士（東京帝大）	助教授（1910.8～1914.2）	林学第四講座分担（1911.7～1914.2）	林学実科教授
和田周造	林学得業士（札幌農学校林学科）	助手（1910頃～）	林学（1910頃～）	演習林担当
富本豊	林学得業士（札幌農学校林学科）	助手（1910頃～1917.12）	林学（1910頃～）	
谷本勇三	林学得業士（東北帝大林学科）	助手（1910頃～）	林学（1910頃～）	演習林担当
森岡勇	農学士（東北帝大）	助教授（1912.8～）	林産製造学（1912.8～）	
影山純介	林学士（東京帝大）	助教授（1912.8～）	林学第四講座分担（1913.7～）	林学実科講師（～1912.8）

石丸文雄	林学士(東京帝大)	講師(1912.10～)	林学[森林利用学及土木学]	盛岡高等農林学校教授
根来簡二	工学士(東京帝大)	助教授(1911.8～)	森林工学(1911.8～)	土木工学科教授
吉川元民	林学士(東京帝大)	助教授(1913頃～)	林学第四講座分担(1914頃～)	
中島広吉	林学士(東北帝大)	助教授(1914.10～)	林学[林学第一講座](1914.10～)	演習林担当
岩崎直人	林学得業士(東北帝大林学科)	助手(1914頃～)	林学(1914頃～)	演習林担当
小野崎浩三	林学得業士(東北帝大林学科)	助手(1912頃～)	林学(1912頃～)	演習林担当 嘱託員(1909頃)
勝野正雄	林学得業士(東北帝大林学実科)	助手(1914頃～1915.6)	林学(1914頃～1915.6)	演習林担当
渡部正	林学士(東北帝大)	副手(1914頃～)	林学(1914頃～)	
佐藤義夫	林学士(東北帝大)	助手(1915頃～)	林学[林学第二講座](1915頃～)	演習林担当
樋口孝	林学士(東北帝大)	副手(1915頃～1916.5)	林学(1915頃～1916.5)	
木下栄次郎	林学士(東北帝大)	副手(1915頃～1916頃)	林学[林学第二講座](1915頃～1916頃)	各科講師(1917頃～)
成田則淑	林学得業士(東北帝大林学実科)	助手(1917頃～)	林学(1917頃～)	演習林担当
竹山賢一	林学得業士(東北帝大林学実科)	助手(1917頃～)	林学(1917頃～)	演習林担当
井上音次郎	林学士(東北帝大)	副手(1917頃～)	林学(1917頃～)	

典拠）「学位」は『帝国大学一覧』『東京帝国大学一覧』『東北帝国大学農科大学一覧』各「卒業生」欄に、「職名（期間）」「講座」は『東北帝国大学農科大学一覧』「職員」欄、「退職者履歴資料」（北海道大学大学文書館蔵）、「功績調書綴」（北海道大学大学文書館蔵）、「名誉教授履歴書綴（二）－２　自昭和27年至昭和35年」（北海道大学大学文書館蔵）による。
注）推定は［　］で示した。

⑴　林学第一講座担当の教官

林学第一講座は森林経理学を専門とした[19]。林学第一講座の教授は小出房吉が務めていた。小出は帝国大学農科大学を卒業し、1900年６月に第一「木材ノ復張収縮及膨張」、第二「木片内ニ於ケル圧力分配ノ模様」、第三「竹材工芸的性質論」の三種の論文により林学博士の学位を得た。これらの論文は、気象学者の北尾次郎（帝国大学農科大学教授）の研究を基礎としており、第一は木材の復張及び収縮膨張について、第二は樹木の形態や樹心位置への木材の断裂への影響について「原則ヲ数理上明ニ」し、第三は竹材の性質について方程式で示すには至らないものの試験成績を示したとの評価を受けた[20]。

盛岡高等農林学校教授（1903年～1907年）を務めた後、1907年10月に農科大に着任した[21]。着任当時は、付設の実業教育課程である「林学科」（1910年に「林学実科」に改称）の教授で、1910年５月に林学第一講座が設置されると、同年８月付で担任となった。

著書には、植物への影響を中心に気候を論じた『日本気候学』（1897年）のほか、盛岡

高等農林学校林学科生徒や早稲田大学政治経済科校外生への講義をもとにした『森林政策』（1908年）、『最近林政論』（早稲田大学42年度政治経済学科第１学年講義録、早稲田大学出版部、1909年）、海外の林業事情についての『世界各国之木材生産と輸出入』前編（内田老鶴圃、1908年）がある。『東北帝国大学農科大学演習林研究報告』にも論文を掲載し、単著論文には「其一・木材形質商ノ曲線ニ就キテ」（第２号、1915年11月）がある。

助教授は、農科大林学科第一期生の中島広吉であった。中島は、1913年に林学科を主席で卒業した林学士で、大学院進学を経て、1914年10月より勤務を開始した。小出房吉・佐藤義夫との共著論文「苫小牧地方蝦夷松収額表」（『東北帝国大学農科大学演習林研究報告』第１号、1915年３月）、小出房吉との共著論文で、北海道産エゾマツ、ドトマツの立木材積の計数を明らかにした「計数速算ノ新法」（『東北帝国大学農科大学演習林研究報告』第３号、1916年３月）を発表するなど、森林経理学を専門とした。

⑵　林学第二講座担当の教官

林学第二講座は造林学・森林保護学を専門とした。教授は新島善直であった。新島は、帝国大学農科大学林学科を1896年に卒業し、1899年５月に札幌農学校に付属する「森林科」（1899年設置、1905年「林学科」に改称）の教授に着任した[22]。森林科は修業年限３年の林業に関する実業教育課程で、設置当初の入学資格は「中学校三学年ヲ修業シタル者」または「同等程度ノ入学試験ニ及第シタル者」[23]で、1901年に中学校卒業程度まで高められた[24]。新島は、1905年から1908年にかけて造林学と森林保護学研究のためドイツに留学した。帰国後の1909年には林学博士の学位を取得した。提出した論文は、「日本産「クリファル」属（穿孔虫ノ一属）ニ就キテ（独文）」、「日本産「スコリトブラチーブス」属（穿孔虫族ノ一属）ノ種類ノ生活状態（独文）」、「「スコリチニ」部（穿孔虫族ノ一部）ノ日本種ニ就テ（英文）」、「北海道産穿孔虫族及ヒ其森林ニ於ケル加害ノ状況（独文）」の四種である[25]。1910年３月に農科大に林学第二講座が設置されると、同年８月に農科大林学科の教授に就任し、同時に林学第二講座の担任となった。

新島は『森林保護学』（帝国百科全書第55編、博文館、1900年）を著した。「人類の害に対する保護」「動物に対する保護」「植物に対する保護」「気象上の害に対する保護」「気象以外の天然の害に対する保護」の五編からなる、総説的な内容であった。札幌農学校赴任後の研究成果としては、「北部及ひ中部日本の「きくひむし」」（『札幌博物学会会報』第３号、1910年10月）において、樺太、北海道、本州で採集されたキクイムシの一覧を発表した。農科大教授となった後には、『森林昆虫学』（1913年、博文館）を著したほか、卒業生の楠菊夫、助手の富本豊との共著論文「こがねむしの被害及び駆除に関する研究報告（第一）」（『東北帝国大学農科大学演習林研究報告』第５号、1917年４月）を発表するなど、昆虫からの森林保護に業績がある。

なお、造林学・森林保護学以外の分野を扱った研究としては、卒業生の村山醸造との共著『森林美学』（成美堂書店、1918年）がある。

林学第二講座の助手は佐藤義夫であった。佐藤は農科大林学科の第二期生で、1914年に卒業した林学士である。卒業直後の1915年頃より農科大林学科の助手として勤務を開始した。卒業後の研究としては、小出房吉、中島広吉との共著「苫小牧地方蝦夷松収額表」（前掲『演習林研究報告』第１号）、小出房吉との共著「其二・薪炭材ノ層積ト実積トノ関係ニ就キテ」（『東北帝国大学農科大学演習林研究報告』第２号、1915年11月）がある。

⑶　林学第三講座担当の教官

林学第三講座は森林利用学を専門とした。1911年の設置当初は新島善直が林学第二講座との兼任で担任を務め、1913年からは宮井健吉が担任を務めた。宮井は1905年に東京帝国大学林学科を卒業した林学士であった。農商務省山林技師を経て、1910年８月に農科大林学科の助教授に着任し、林学実科教授をも兼任していた[26]。1910年から1913年にかけて、森林利用学の研究を目的にドイツに留学した。留学中の1910年に東北帝大農科大助教授に任じられ、帰国後の1913年７月には林学第三講座の担任に、1915年８月には教授に昇任した。

宮井は、北海道産のエゾマツやトドマツの木材の強度について論じた論文「其二　凍結針葉樹材ノ抗折強ニ就キテ」（大沢正之[27]共著、『北海道帝国大学農学部演習林研究報告』第２巻第１号、1923年３月）、「北海道産木材ノ弾性及強度ニ関スル研究　Ⅰ．天塩産とどまつ」（大沢正之共著、『北海道帝国大学農学部演習林研究報告』第３巻第１号、1925年２月）を発表するなど、森林利用学を専門とした。

⑷　林学第四講座担当の教官

林学第四講座は理水及び砂防工学を専門とした。1911年の講座設置当初の担任は、助教授の堀観次郎と、同じく助教授の内山幸三であった。

堀観次郎は、1905年に東京帝国大学農科大学を卒業した林学士で、1906年６月に札幌農学校付属の林学科の教授に着任した。1907年９月に農科大が設置されると、引き続き付属の林学科で教授を務めるとともに、農科大の助教授を務めた[28]。1911年７月に林学第四講座の分担となるが、1912年６月に帝室林野管理局の技師となり、転出した[29]。

内山幸三は東京帝国大学農科大学卒業の林学士で、1910年７月に農科大助教授及び付属の林学実科教授となり、1911年７月に、堀と同時に林学第四講座の分担に任じられた。内山が1914年２月に退職した後は、東京帝国大学農科大学を卒業した林学士の吉川元民が林学第四講座の分担となった。

堀が転出した後には、影山純介が林学第四講座分担に就任した。影山もまた、堀、内山と同じく東京帝国大学農科大学を卒業した林学士であった。影山は、1912年８月に農科大助教授に着任、林学第四講座を分担し、林学実科講師を兼任した。1925年には博士論文「材木ノ生長ト陽光ノ強度トニ関スル数理的研究」[30]により、林学博士の学位を得た。また、1927年からは「森林工学講座」（1921年設置）分担となった。

⑸　林政学及森林管理学講座担当の教官

林政学及森林管理学講座の教授は宍戸乙熊であった。宍戸は1902年に東京帝国大学農科大学を卒業した林学士であった[31]。1903年に札幌農学校教授に着任し、付属の林学科の教授を務めた。1907年９月の農科大の設置とともに農科大助教授に就任し、1910年９月には教授に昇任した。なお、1908年２月から1912年８月にかけて、宍戸は林政学の研究の為にドイツに留学中であった。1912年に林政学及森林管理学講座が設置され、担任となった後、1917年に東北帝国大学総長の推薦により林学博士の学位を取得した[32]。

宍戸の業績には「商工立国と林業」（『大日本山林会報』第374号、1914年１月）、「北海道国有林に於ける部分林設定」（『札幌農林学会報』第９年第39号、1917年）等がある。また、1933年には「満州国の林業」（満蒙研究資料第２号、北海道帝国大学満蒙研究会）を発表するなど、「外地」の調査・研究にも携わった。

⑹　担当講座不詳の助教授

表２－１にあげた農科大林学科の教官のうち、一部の助教授、助手、副手の所属講座については『東北帝国大学農科大学一覧』等に記載がなく、不詳である。

森岡勇は、1910年に東北帝大農科大農芸化学科を卒業した農学士で、卒業直後に東北帝大農科大で演習林林産物製造取調を、翌1911年に林学実科講師を嘱託された[33]。1912年には東北帝大助教授に就任した。1914年以降、野幌林業試験場で「林産製造及森林化学ニ関スル試験事務」の嘱託を受けていた。1923年に有機製造化学研究のためにイギリス・ドイツ・アメリカに留学し、帰国後は東北帝大農科大を離れ、浜松高等工業学校の教授に着任した。

根来簡二は、1907年に東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業した工学士である[34]。1909年に付属の「土木工学科」の教授として東北帝大農科大に着任した。土木工学科とは、「土木工学ニ関スル高等ノ教育ヲ授ク」ことを目的とした、修業年限３年の付属の教育機関である[35]。1911年より農科大助教授を兼任し、「森林工学」を担当していた。本稿で扱う1918年４月以降も北海道帝国大学で勤務を続けており、1921年に新たに設置された「森林工学講座」を分担した。

⑺　担当講座不詳の助手

助手として勤務していた人物には、和田周造、富本豊、谷本勇造、岩崎直人、小野崎浩三、勝野正雄、成田則淑、竹山賢一の八名を確認できる。彼らは、札幌農学校に付設していた専門学校程度の教育課程である「林学科」や、付設の林学科の後を承けた「東北帝国大学農科大学林学科」（1910年より「林学実科」に改称）を卒業し、「林学得業士」の称号を得た人々であった。

なお、助手の多くが演習林の業務を担当している。東北帝大農科大は、1907年９月の設置時点で３か所の地方演習林（雨龍演習林、天塩第一演習林、苫小牧演習林）を設置して

おり、1912年８月に天塩第二演習林、1913年６月に樺太演習林、同年９月に朝鮮演習林、1916年に台湾演習林を新たに設置した。『東北帝国大学農科大学一覧　自大正六年至大正七年』所載の「職員欄」によると、演習林の業務を担当する助手の一部は地方演習林に配属されていた。例えば、谷本勇造は苫小牧演習林に、岩崎直人は朝鮮演習林に、小野崎浩三は天塩第一演習林に、成田則淑は天塩第二演習林に、竹山賢一は雨龍演習林に配置されていた。

１－３．林学科の講義の担当教官

授業科目の担当教官については、同窓会誌『林学会報』第８号「雑報」に掲載された「林学科及林学実科課程及受持教官」[36]より、1913年の担当教官が判明する。

表５　東北帝国大学農科大学林学科の授業担当教官（1913年）

学年	授業科目	担当教官	身分	学位
第一年	岩石学	大井上義近	助教授	理学士
	土壌学	吉井豊造	教授	農学博士、農芸化学士
	気象学	時任一彦	教授	農学士、理学士
	森林植物生理及生態学	郡場寛	講師	理学博士、理学士
	森林植物形態及分類学	宮部金吾	教授	理学博士、農学士
	森林昆虫学	松村松年	教授	理学博士、農学士
	応用鳥学	新島善直	教授	林学博士、林学士
	最小二乗法	三田村孝吉	助教授	理学士
	森林工学	根来簡二	助教授	工学士
	森林測量学	影山純介	助教授	林学士
	測樹学	小出房吉	教授	林学博士、林学士
	造林学	新島善直	教授	林学博士、林学士
	経済学	森本厚吉	助教授	農学士
	法学通論	大沼惟隆	講師	法学士
	経済学演習	森本厚吉	助教授	農学士
	岩石学実験	大井上義近	助教授	理学士
	森林植物学実験	宮部金吾	教授	理学博士、農学士
	森林昆虫学及応用鳥学実験	松村松年 小熊捍	教授 助教授	理学博士、農学士 農学士
	森林測量学実習及製図	影山純介	助教授	林学士
	森林数学実習	小出房吉	教授	林学博士、林学士
	造林学実習	新島善直	教授	林学博士、林学士
	林学実地演習	不定	–	–

第二年	林価算法及林業較利学	小出房吉	教授	林学博士、林学士
	森林工学	根来簡二	助教授	工学士
	林産製造学	森岡勇	助教授	農学士
	樹病及木材腐蝕学	宮部金吾	教授	理学博士、農学士
	木材工芸的性質論	宮井健吉	助教授	林学士
	造林学	新島善直	教授	林学博士、林学士
	森林利用学	宮井健吉	助教授	林学士
	森林工芸学	宮井健吉	助教授	林学士
	森林理水及砂防工学	石丸文雄	講師	林学士
	森林経理学	小出房吉	教授	林学博士、林学士
	林業政策	宍戸乙熊	教授	林学士
	林政学	宍戸乙熊	教授	林学士
	森林法律学	香川茂正	講師	法学士
	民刑事訴訟法	香川茂正	講師	法学士
	財政学	森本厚吉	助教授	農学士
	林産製造学実験	森岡勇	助教授	農学士
	行政法	大岡叢	事務官	法学士
	林価算法及林業較利学演習	小出房吉	教授	林学博士、林学士
	森林工学計画及実習	根来簡二	助教授	工学士
	森林理水及砂防工学計画及実習	石丸文雄	講師	林学士
	造林学実習	新島善直	教授	林学博士、林学士
	森林利用学実験	宮井健吉	助教授	林学士
	林学実地演習	不定	–	–
	木材工芸的性質実験	宮井健吉	助教授	林学士
第三年	造林学	新島善直	教授	林学博士、林学士
	森林利用学	宮井健吉	助教授	林学士
	森林美学	新島善直	教授	林学博士、林学士
	森林保護学	新島善直	教授	林学博士、林学士
	森林経理学	小出房吉	教授	林学博士、林学士
	林政学及管理学	宍戸乙熊	教授	林学士
	森林管理学	宍戸乙熊	教授	林学士
	木材貿易論	宍戸乙熊	教授	林学士
	林業政策	宍戸乙熊	教授	林学士
	農政学	高岡熊雄	教授	法学博士、農学士
	植民学	高岡熊雄	教授	法学博士、農学士
	狩猟論	新島善直	教授	林学博士、林学士
	森林牧畜論	–	–	–
	林業史	–	–	–
	造林学実習	新島善直	教授	林学博士、林学士

	森林利用学実験	宮井健吉	助教授	林学士
	森林経理学実習	小出房吉	教授	林学博士、林学士
	林学実地演習	不定	−	−
	卒業論文	−	−	−

典拠）『林学会報』第８号、「雑報」、「林学科及林学実科課程及受持教官」1913年12月及び『東北帝国大学農科大学一覧　自大正二年至大正三年』所載の「職員」欄による。
注）「東北帝国大学農科大学規則」（1913年６月改正）、『東北帝国大学農科大学一覧　自大正二年至大正三年』により「授業科目」の表記を改めた。

林学第一講座教授の小出房吉が「測樹学」「林価算法及林業較利学」「森林経理学」「林価算法及林業較利学演習」「森林数学実習」を、林学第二講座教授の新島善直が「応用鳥学」「造林学」「造林学実習」「森林美学」「森林保護学」「狩猟論」を、林学第三講座担任の宮井健吉が「木材工芸的性質論」「森林利用学」「森林工芸学」「森林利用学実験」を、林政学及森林管理学講座教授の宍戸乙熊が「林業政策」「林政学」「森林管理学」「木材貿易論」を担当しており、それぞれの専門に沿って複数の授業を受け持っていることがわかる。「森林理水及砂防工学」「森林理水及砂防工学計画及実習」を担当する教官は、林学第四講座分担者の堀観次郎、内山幸三ではなく、石丸文雄である。

また、「森林植物形態及分類学」「森林植物学実験」を宮部金吾が、「森林昆虫学」「森林昆虫学及応用鳥学実験」を松村松年が担当するなど、札幌農学校以来の中心的な教官が担当する授業があることも注目される。

２．東北帝国大学農科大学林学科学生の卒業論文について

２－１．林学科学生の卒業論文題目

東北帝大農科大林学科では、森林経理学を専攻する林学第一講座、造林学・森林保護学を専攻する林学第二講座、森林利用学を専攻する林学第三講座、理水及砂防工学を専攻する林学第四講座、林政学及森林管理学講座に属す教官陣のもとで学生の教育が行われていた。

林学科の授業科目では、三学年で卒業論文の提出を設定している。卒業論文は、指導教官による指導のもとで作成された。農科大林学科を卒業した学生59名の卒業論文の原本は、大部分が北海道大学農学研究院図書室に所蔵されている。農学研究院図書室では所蔵していない卒業論文については、農科大の同窓会誌『文武会会報』から、各年度の卒業生が提出した卒業論文の題目が判明する（表６）。また、論文の専門分野として、森林経理学、造林学・森林保護学、森林利用学、理水及砂防工学、林政学及森林管理学の五類に分類することができる。

表 6　東北帝国大学農科大学林学科卒業生の卒業論文題目一覧（1913～1917年）

卒業年月	氏名	卒業論文題目	専門分野
1913.7.	中島　広吉	Holz Ertragstafeln für die Tanne.	森林経理学
1913.7.	松井　精一	個人経済ヨリ林業ヲ論ズ	林政学
1913.7.	蓮見　道太郎	砂防混凝土堰堤設計（Entwurf zur Beton-talsperre.）	理水・砂防工学
1913.7.	草間　正慶	Ueber eine Abart von fomes Hartigii, (Allesch.) Sacc. Et Jrao., wodurch an sachalinischen Tanne Weißfäule entstand.	造林学
1913.7.	陳　嶸	製材工場設計	森林利用学(2)
1913.7.	古屋　元輔	林木種子ニ就テ	造林学
1913.7.	米田　繁治郎	椴松ノ傘伐更新ヲ論ズ	造林学
1913.7.	三隅　英雄	天然保存森林公園ニ関スル研究	造林学
1914.7.	佐藤　義夫	蝦夷松ニ対スル傘伐更新法ノ適否ヲ論ズ	造林学
1914.7.	金原　善知	本邦木材ノ取引習慣ニ就テ	林政学
1914.7.	永根　信雄	占冠及富良野第一事業区ニ於ケル伐採ト更新トノ関係	造林学
1914.7.	深谷　留三	林業労働論	林政学
1914.7.	大塚　良敦	札幌神社附属林施業計画及境内公園林設計　附札幌神社附属林施業計画簿表	森林利用学(2)
1914.7.	横瀬　孝	落葉松ニ対スル造林学及ビ森林保護学上ノ研究　落葉松成長曲線図/野鼠ノ被害ノ研究/樹幹折解簿表	造林学
1914.7.	立花　繁	北海道産炭材の乾留試験	森林利用学(3)
1914.7.	渡部　正	鉱山備林	森林利用学(2)
1914.7.	樋口　孝	桐樹ノ特性	造林学
1914.7.	三宅　可	製紙原料備林	森林利用学(2)
1915.7.	立岩　精一	石堰堤ノ形状ニ就テ	理水・砂防工学
1915.7.	八谷　正義	Über einige Krankheiten der Espe in Japan.	造林学
1915.7.	後藤　収蔵	北海道産楢材ノ経済的調査	林政学
1915.7.	堰八　愛勲	北海道産重要樹種ノ割裂性ニ就テ	森林利用学(1)
1915.7.	柴田　勘助	北海道産重要樹種ノ負担強ノ研究　附屈撓性	森林利用学(1)
1915.7.	楠　菊夫	本邦産食用金亀子科ニ就テノ研究	造林学
1915.7.	山崎　義政	第一問題　Schneider 公式ニ於ケル常数ノ研究/第二問題　円板ノ合理的直径査定ノ研究	森林経理学
1915.7.	小栗　儀造	椴松ノ樹皮ト針葉トノ利用ニ就イテ	森林利用学(1)
1915.7.	呉　愷	第二回北海道産炭材乾留試験	森林利用学(3)
1915.7.	山崎　良邦	野鼠ノ駆除ニ就テ	造林学
1915.7.	木下　栄次郎	やまならしニ対スル造林学上ノ研究	造林学
1915.10.	諸富　敏	北海道産主要樹種抗圧強ノ研究	森林利用学(1)
1916.7.	服部　正相	我国森林経理法ト墺国森林経理法トノ比較研究	森林経理学
1916.7.	林　吉夫	前更作業収額規整法之学理的観察	森林経理学
1916.7.	今見　昇	闊葉樹種ノ繊維素ニ関スル研究	森林利用学(1)
1916.7.	石尾　和作	択伐林収額規整法ノ理論的研究	森林経理学

1916.7.	矢田貝　寛	条播ト散播トノ比較ヲ論ズ	造林学
1916.7.	牛尾　朋次	市町村林ノ造成並ニ之ガ改良ニ就テ	造林学
1916.7.	榎　俊三郎	北海道槲樹剥皮林論	造林学
1916.7.	宇野　貞吉	北海道産木材二十種ノ比重及吸水性ノ研究	森林利用学(1)
1916.7.	渡辺　正富	鉄道運搬上木材ノ取扱ニ就テ	森林利用学(2)
1916.7.	犬塚　悌三	東予地方扁柏收額表	森林経理学
1916.7.	渡辺　保次	北海道木材運搬法ノ現状及改良	森林利用学(2)
1916.7.	田沼　福之助	独逸桧材之物理的並に工芸的性質	森林利用学(3)
1916.7.	根矢　亀次郎	中林作業収額規整法ニ就キテ	森林経理学
1916.7.	田村　譲司	北海道産薪材及木炭測熱試験	森林利用学(3)
1916.7.	山口　正造	白樺材ノ利用法	森林利用学(1)
1916.7.	梅田　治明	我ガ国ニ於ケル森林組合設立ノ可否ヲ論ズ	林政学
1916.10.	川口　義一郎	北海道産樹種灰分之研究	森林利用学(3)
1916.12.	倉石　貞三	各種計数ノ比較研究	森林経理学
1916.12.	村山　醸造	[1916年選科卒業]北海道有用樹木ノ美的価値ヲ論ス	造林学
1917.7.	狐崎　信夫	其一　防雪に関する研究/其二　各種形数公式(殊に小出式、寺崎式、Schiffel式、Prytz式)精密度ノ比較研究	森林経理学
1917.7.	福山　伍郎	森林収額規整法ノ新分類法私見	森林経理学
1917.7.	三宅　斌	椴松林ノ更新ニ及ホス陽光ノ影響ニ就テノ研究	造林学
1917.7.	蔭山　秀夫	本道ニ於ケル高山林ノ利用ト滑道運材法	森林利用学(2)
1917.7.	佐々木　善次郎	岩手県公有林野ノ整理ニ就イテ	林政学
1917.7.	二木　春松	第一　北海道産トドマツ及ビエゾマツ各単木ノ中央直径ヲ基礎トスル材積ト実積トノ関係ニ就キ/第二　北海道産トドマツノ各単木ノ直径ノミニヨル求積公式(実験公式)ニ就キ/第三　北海道産トドマツ及ビエゾマツノ樹皮量ニ対スル実験公式ニ就キ	森林経理学
1917.7.	杉田　静吾	炭竈築造用土ニ就テ	森林利用学(3)
1917.7.	井上　音次郎	我国保安林ノ整理並ニ将来ノ経営ニ就テ	林政学
1917.10.	太田　俊賢	本邦慣行大割造材賃計算法ニ就イテ	森林経理学
1917.12.	斉藤　良秀	[1915年選科卒業]森林施業規程ニ就テ(我国有林及御用林ニ於ケル現行規程並「バイエルン」王国ノ施業規程ニ就テ)	林政学

典拠）北海道大学農学研究院図書室所蔵の卒業論文、『文武会々報』第70号「文武会庶務報告」、『文武会々報』第79号「庶務報告」による。

注１）「専門分野」欄では、「造林学・森林保護学」を「造林学」と、「理水及砂防工学」を「理水・砂防工学」と、「林政学及森林管理学」を「林政学」と略した。また、「森林利用学」のうち、材木の性質・利用法に関わる論文を(1)、材木の伐採・造材・運搬等に関わる論文を(2)、林産製造に関わる論文を(3)とした。

注２）選科卒業後に農科大林学科を卒業した者で、卒業論文の提出が確認できない場合は、選科卒業時の論文題目を記載し［　年選科卒業］と表示した。選科生とは、講義科目のうち一科目または数科目の専修を許された生徒である（「選科規程」、「東北帝国大学農科大学規則」、前掲『東北帝国大学農科大学一覧自明治四十年至明治四十一年』、36-37頁）。

２－２．専攻分野と卒業後進路の特徴

東北帝大農科大林学科の卒業論文と卒業生の進路について、以下に専攻分野別に確認する。

⑴　森林経理学専攻学生の卒業論文・卒後進路

森林経理学に関する最初の卒業論文は、モミの木材収穫表をテーマとした中島広吉「Holz Ertragstafeln für die Tanne.」であった。1915年の小出房吉教授を筆頭著者とする、中島広吉助教授、佐藤義夫助手の共著論文「苫小牧地方蝦夷松収額表」[37]発表後には、石尾和作「択伐林収額規整法ノ理論的研究」、福山伍郎「森林収額規整法の新分類法私見」など、「収額規整法」をテーマとする卒業論文が提出された。1916年の小出房吉教授、中島広吉助教授「計数速算ノ新法」[38]発表後には、倉石貞三「各種計数ノ比較研究」、狐崎信夫「其二　各種計数公式（殊に小出式、寺崎式、Schiffel 式、Prytz 式）精密度ノ比較研究」が提出された。

森林経理学に関する卒業論文を提出した卒業生には、東北帝国大学大学院に進学し、東北帝大農科大助教授となった中島広吉のほか、演習林で勤務した石尾和作、福山伍郎がおり、東北帝大農科大林学科・北海道帝国大学農学部林学科に関わっていく。福山伍郎は、1922年５月には東北帝国大学大学院に入学し、「木材ノ利用ニ関スル事項」を研究していた[39]。1924年２月には北海道帝国大学農学部助教授として勤務しており、林産製造学を担当していた[40]。

⑵　造林学・森林保護学専攻学生の卒業論文・卒後進路

造林学・森林保護学分野の卒業論文は、計17本である。造林学・森林保護学に関する論文として、造林方法や動植物学に関する論文がある。造林学・森林保護学に関するテーマで卒業論文を書いた学生には、卒業後に助手となり、後に林学第二講座の教授となった佐藤義夫や、北海道帝国大学農学部助教授となり、獣害の観点からエゾヤチネズミの研究を行った木下栄次郎がいる。

また、造林学・森林保護学を専門とする新島善直教授は森林美学についても指導を行っていた。森林美学とは、「森林に関する一切の美的活動を研究する学」[41]である。村山醸造「北海道有用樹木ノ美的価値ヲ論ス」、三隅英雄「天然保存森林公園ニ関スル研究」は、森林美学に関する研究である。

⑶　森林利用学専攻学生の卒業論文・卒後進路

森林利用学が扱う対象は、(1)木材の性質や利用法、(2)材木の伐採・造材・運搬等、(3)林産物の製造に分けられる[42]。卒業論文は、計20本が提出された。なお、以下に述べるように、類似のテーマの卒業論文が短期間に集中する傾向にある。

材木の性質・利用法に関わる論文は、堰八愛勲「北海道産重要樹種ノ割裂性ニ就テ」、

柴田勘助「北海道産重要樹種ノ負担強ノ研究　附屈撓性」など、北海道産の樹木の性質を中心に、1915年から1916年にかけて７本が提出されている。

材木の伐採・造材・運搬等に関わる論文には、陳嶸「製材工場設計」がある。陳嶸は中国からの留学生であった。帰国後は筧橋農業学校長、南京第一農学校教諭を経て、金陵大学教授に就任した。著書に『竹的種類及栽培利用』（中国林業出版社、1894）、『造林学概要』（中華農学会、1900年）、『中国主要樹木造林法』（金陵大学農林叢書１、金陵大学農林科樹木学標本室、1930年）等がある。1914年には目的別の山林の設計に関わる論文（大塚良敦「札幌神社附属林施業計画及境内公園林設計」、渡部正「鉱山備林」、三宅可「製紙原料備林」）が提出された。1916年から1917年には、木材の運搬に関わる論文（渡辺正富「鉄道運搬上木材ノ取扱ニ就テ」、渡辺保次「北海道木材運搬法ノ現状及改良」、蔭山秀夫「本道ニ於ケル高山林ノ利用ト滑道運材法」）が提出された。

林産製造学に関わる論文は、立花繁「北海道産炭材の乾留試験」、呉愷「第二回北海道産炭材乾留試験」、杉田静吾「炭竈築造用土について」等、製炭に関わるテーマが中心である。

⑷　理水及び砂防工学専攻学生の卒業論文・卒後進路

理水及び砂防工学をテーマとした卒業論文は、1913年から1917年を通じて、蓮見道太郎「砂防混凝土堰堤設計（Entwurf zur Beton-talsperre.）」、立岩精一「石堰堤ノ形状ニ就テ」の２本で、各専攻分野のうちで最も数が少ない。理水及砂防工学講座である林学第四講座は、教授が配置されず、助教授２名による分担体制が続いていたことが影響した可能性が考えられる。

蓮見道太郎は、卒業後、1920年まで朝鮮総督府農商工部で勤務した後、北海道帝国大学農学部において、演習林事業取扱嘱託（1920年５月～）、林学実科講師（1920年９月～）、農学部助教授（1921年３月～）として勤務した[43]。農学部では、林学教室で森林測量学、森林数学、森林土木学を担当した[44]。1924年に九州帝国大学農学部に転出し、林学科第二講座（森林利用学教室）の助教授[45]として、砂防工学・森林土木学を担当した[46]。砂防工学の講義、朝鮮での砂防工学実習のみならず、森林測量学実習をも指導した[47]。海外留学後、北海道帝国大学に論文「溢流堰ノ堤冠及表法面ニ於テ流下スル水ノタメニ生ズル静水圧ノ大サ並ニ分布ニ関スル研究」を提出し、学位（林学博士）を取得した[48]。九州帝国大学農学部には、1938年に林学第六講座（砂防工学教室）が設置され、蓮見は担任を分担した。1941年に担任となり、1942年には教授に昇任したが、翌1943年に死去した[49]。

立岩精一は、1915年の卒業後、東北帝大大学院に進学した[50]。学位は取得せず、1916年11月には山形県林務課に勤務していた[51]。

⑸　林政学及森林管理学専攻学生の卒業論文・卒後進路

林政学及森林利用学に関わる卒業論文は、1913年から1917年までの間で７本が提出され

た。年１本～３本が提出されており、年度による大きな変化は見られない。論文のテーマについては、松井精一「個人経済ヨリ林業ヲ論ズ」、金原善知「本邦木材ノ取引習慣ニ就テ」、深谷留三「林業労働論」、後藤収蔵「北海道産楢材ノ経済的調査」、梅田治明「我ガ国ニ於ケル森林組合設立ノ可否ヲ論ズ」が経済学に関するテーマを掲げ、1917年に提出された佐々木善次郎「岩手県公有林野ノ整理ニ就イテ」、井上音次郎「我国保安林ノ整理並ニ将来ノ経営ニ就テ」は公有林の経営をテーマとしている。

卒業後は、全ての卒業生が官庁での勤務を経験している。松井精一は北海道庁技手として野幌林業試験場、金原善知は帝室林野管理局、深谷留三は朝鮮総督府山林課[52]、後藤収蔵は朝鮮総督府営林廠[53]、梅田治明は和歌山県等で県技手・県技師[54]を、佐々木善次郎は北海道庁[55]、井上音次郎は農林省山林局[56]での勤務を確認できる。

おわりに

東北帝大農科大林学科の授業科目は1907年９月に「東北帝国大学農科大学規則」により定められ、同規則の1910年６月の改正、1913年６月の再改正に伴って変更された。

1910年の規則改正時点では、森林経理学を扱う林学第一講座と、造林学・森林保護学を扱う林学第二講座が設置されていた。1910年の規則改正時には、「森林動物学」が「森林昆虫学」及び「応用鳥学」に分割された。林学第二講座の教授である新島善直が虫害を引き起こすキクイムシやコガネムシなどの研究を行っており、昆虫学の教授である松村松年が「森林昆虫学」等の授業を担当しているなど、昆虫学に関する研究が充実していたことが背景にあると推測できる。

1910年の授業科目改正の後、林学第三講座、林学第四講座、林政学及森林管理学講座が設置された。1913年に改正された授業科目では、1910年に比較して、林業史、農政学、森林美学等の新科目の設定や、随意科目であった狩猟論、植民学などの必修化があり、講義内容がより多様になった。1910年、1913年の改正を通じて、講義科目の細分化と、講義に対応する実験の増加が見られた。

また、卒業論文を各専攻別に分類すると、森林経理学、造林学・森林保護学、森林利用学をテーマとする論文の分量が、理水及び砂防工学や林政学及森林管理学に関わる論文よりも多い傾向がある。理水及び砂防工学を扱う林学第四講座については、教授を置かず助教授２名による分担が続いていたこと、また林政学及森林管理学講座は1912年に設置されて間もないことが、各専攻の論文数の偏りに繋がったものと推量できる。理水及び砂防工学を専攻した学生で、卒業後に九州帝国大学で教授となり、研究・教育にあたった者も見られた。林学科における教育と、教官の専門との関わりについては、今後も引き続き課題としたい。

［注］

1）「東北帝国大学ニ関スル件」（1907年６月勅令第二百三十七号）、『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、1907年12月、８頁。

2）「北海道帝国大学ニ関スル件」（1918年３月勅令第四十三号）、『北海道帝国大学一覧　自大正七年至大正八年』、1918年12月、15頁。

3）「帝国大学令」（1919年２月６日勅令第十二号）、『北海道帝国大学一覧　自大正九年至大正十一年』、1922年４月、34-37頁。

4）「東北帝国大学農科大学規則」、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、18-31頁。

5）「東北帝国大学農科大学講座ノ種類及其ノ数」（1907年６月勅令第二百四十号、1909年５月改正）、『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十二年至明治四十三年』、1909年12月、10-11頁。

6）「東北帝国大学農科大学講座ノ種類及其ノ数」（1907年６月勅令第二百四十号、1910年３月改正）、『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』、1910年12月、10-11頁。

7）「東北帝国大学農科大学講座ノ種類及其ノ数」（1907年６月勅令第二百四十号、1910年３月及び1911年５月改正）、『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十四年至明治四十五年』、1911年７月、12-13頁。

8）「東北帝国大学農科大学講座ノ種類及其ノ数」（1907年６月勅令第二百四十号、1910年３月及び1911年５月改正）、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十四年至明治四十五年』、12-13頁。

9）『東京大学百年史』通史一、第三編「帝国大学の創設」1984年、944-947頁。

10）「東北帝国大学農科大学及各学科開始ノ件」（1907年６月文部省令第二十一号）、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、10頁。

11）『東北帝国大学農科大学一覧』「卒業生」欄より集計。

12）「東北帝国大学農科ニ関スル件」（1907年６月勅令第二百三十七号）、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、36頁。

13）「学年学期休業規程」、「東北帝国大学農科大学規則」、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、17-18頁。

14）「沿革略」、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、５頁。

15）「東北帝国大学農科大学規則」、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、28-31頁。

16）「東北帝国大学農科大学規則」（1910年６月改正）、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』、18頁。林学科の授業科目は28-31頁掲載。

17）「東北帝国大学農科大学規則」（1910年６月及び1913年６月改正）、『東北帝国大学農科大学一覧　自大正二年至大正三年』、1913年12月、24頁。林学科の学科目は39-44頁掲載。

18）他学科の授業科目は「東北帝国大学農科大学規則」（前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』、18-31頁）を参照した。

19）『北大百年史』部局史、農学部（第２部）、930-931頁。以下、講座の担当内容は同資料による。

20）「学事」、1900年６月７日付『官報』第5077号、４頁。

21）「退職者履歴資料九、大正15年」（北海道大学大学文書館蔵）、110-135頁。以下、小出の経歴は同資料による。

22）「退職者履歴資料二四、昭和18」（北海道大学大学文書館蔵）、31-55頁。以下、新島の経歴は同資料による。

23）「森林科規程」、『札幌農学校一覧　自明治三十二年至明治三十三年』、1900年１月、57-61頁。

24）「森林科規程」（1898年５月追加）、『札幌農学校一覧　自明治三十三年至明治三十四年』、1900年12月、56-64頁。

25)「学事」、1909年12月16日付『官報』第7945号、20-21頁。
26)「退職者履歴資料一二、昭和４～５年」（北海道大学大学文書館蔵）、82-101頁。以下、宮井の履歴については同資料による。
27) 大沢正之は、北海道帝国大学農学部林学科を1919年７月に卒業した。宮井との共著論文を発表した1923年から1925年には、林学第三講座の助教授を務めていた。
28) 堀の札幌農学校での教官歴については、「付表一　札幌農学校の教官（一八八三～一九〇七）」、『北大百年史』通説、161頁及び「退職者履歴資料二、７、明治45年」（北海道大学大学文書館蔵、987-994頁）を参照した。
29)「辞任及辞令」、1912年６月26日付『官報』第8705号、５頁。
30) 北海道大学附属図書館所蔵。
31)「功績調書綴（二）」（北海道大学大学文書館蔵）。以下、宍戸の経歴は同資料による。
32)「学事」、1917年３月14日付『官報』第1383号、11頁。
33)「退職者履歴資料八、大正14」（北海道大学大学文書館蔵）、136-145頁。以下、森岡の経歴は同資料による。
34) 前掲「退職者履歴資料八、大正14」（北海道大学大学文書館蔵）、146-155頁。以下、根来の経歴は同資料による。
35)「土木工学科規則」、「東北帝国大学農科大学規則」、前掲『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十二年至明治四十三年』、49-53頁。
36)『林学会報』第８号、1913年12月、92-93頁。
37) 前掲『東北帝国大学農科大学演習林研究報告』第２号。
38) 前掲『東北帝国大学農科大学演習林研究報告』第３号。
39)「学生及生徒姓名」（大正十一年五月末日現在）、『北海道帝国大学一覧　自大正十一年至大正十二年』、1923年４月、304頁。
40)「職員」（大正十三年二月現在）、『北海道帝国大学一覧　自大正十二年至大正十三年』、1924年４月、87頁。
41) 新島善直、村山醸造『森林美学』、第一章総説、1918年９月、７頁。
42) 本田静六『林学教科書』第四編「森林利用学」（1905年、145頁）では「森林利用学とは、木材の、工芸的性質、およびその適用、材木の伐採・造材・運搬並に林産物の製造等につきて論究する学なり」と説明している。
43)「退職者履歴資料七、大正13」（北海道大学大学文書館蔵）、27-33頁。
44)「職員」（大正十一年十二月現在）、前掲『北海道帝国大学一覧　自大正十一年至大正十二年』82-83頁。
45)『九州大学五十年史　学術史　上巻』第３編農学部第９章林産学科、1967年11月、815頁。
46)「職員」、『九州帝国大学一覧　自大正十三年至大正十四年』、1924年９月、89頁。
47) 前掲『九州大学五十年史　学術史　上巻』第３編農学部第４章林学科、749-751頁。
48)「学位授与」、『北海道帝国大学一覧　昭和六年』、1931年10月、396頁。
49)「追悼」、『札幌同窓会第六十七回報告』、1944年８月、25頁。
50) 山本美穂子「東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学の大学院制度について」は、東北帝国大学大学院学生であった立岩について、指導教官は小出房吉教授、吉川元民助教授、石丸文雄講師であり、攻究事項は森林理水砂防工事攻究で、1916年以降は山形県属（技手）であったと調査している。
51)『シルバ会会員名簿　大正五年十一月末現在』、1916年11月。
52) 松井、金原、深谷の勤務先については「札幌同窓会会員名簿（大正三年十一月末日現在）」、『札幌同窓会第三十一回報告』、1914年12月。

53）後藤の勤務先については「札幌同窓会会員名簿（大正四年年十二月末日現在）」、『札幌同窓会第三十三回報告』。
54）梅田の勤務先については前掲『大正五年十一月末現在　シルバ会札幌同窓会会員名簿』、1916年11月。
55）佐々木の勤務先については『大正十四年七月現在　シルバ会札幌同窓会会員名簿』、1925年７月。
56）井上の勤務先については『大正十一年十一月末現在　シルバ会札幌同窓会会員名簿』、1922年11月。

［後記］　本研究は、JSPS 科研費 JP20Ｋ1383800の助成を受けたものである。

（ささき　ともこ／北海道大学大学文書館員）